入選

水が教える「恵み」と「災い」

高岡市立牧野中学校　一年　山本　耕太郎

水は、地球上の全ての生命の源であり、特にぼくたちの生活や農業、工業などにとって不可欠なものです。

ぼくは小学五年生の時、科学作品「地すべりの研究」をしました。台風や梅雨によく起こる地すべりは、地面がずるずると動き出し、家屋をこわし、道路や川までうめてしまいます。地球温暖化による豪雨や洪水が多くなり、問題視されています。水の「災い」―三年前の台風十九号により長野県で起きた地すべりのニュースを見てショックを受けたのが研究のきっかけでした。実際にぼくは地すべり模型の再現をし地すべりを起こしました。水の怖さを知ったとともに、地層の表面を草木（水ごけ）でおおうことにより、くずれにくくなり、また模型にストローで地下水路を作るとそこから水が流れ出て地すべりは起こらないことを考察しました。まさに「緑のダム」の役割を知ることができました。「災い」の一面をぼくたち各々が変えていくべきだ、変えることができると強く感じた瞬間でした。

また、ぼくは「人間は、水と睡眠さえとっていれば、たとえ食べものがなかったとしても二、三週間は生きられる。だが、水を一滴も飲まないと、四、五日で死んでしまう。」とサバイバル本を読んで驚きました。水の「恵み」―ぼくたちの暮らしは水によって支えられています。朝起きてぐっと飲む一杯の水のおいしさ、夏に一浴びするシャワーのそう快さ、母が作ってくれる美味しい味そ汁、毎日学校に持参している水筒のお茶、など数えたらきりがありません。そしてまた日本にはたくさんの温泉が存在します。わき出る温泉は人の心や体をいやしてくれます。祖母の喜寿のお祝いで訪れた石川県では、家族で入ることができるろ天風呂があり、ぼくは久しぶりにみんなと入りました。心がほっこりし体もポカポカで何とも言い難い気持ちになりました。

水とはどんなものか、とぼくはここまで考えたことはありませんでした。しかしこれをきっかけとして、洪水の一原因である温暖化を防ぐためにもなる、ぼくと家族が今続けている簡単で小さなことの積み重ねを大切にしていきたいと思いました。具体的に言うと、エコバックを持ち歩く、ペットボトル飲料を買わずマイボトルにわかしたお茶を入れて持つ、生活用品は詰め替え用を買う、３Ｒに努めること、水を出しっぱなしにしない、などをこの先もずっと実行していきたいと思います。

水の循環性を学び、その重要性を理解したつもりだったけれど、地球上の水は無限ではないことを忘れずに、これからも節水を心がけたい、次いで、水のあらゆる恩恵に感謝しながら生活しなければならないことを改めて考え直したいです。